

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up, TOHOKU!

無料

第58号

毎月発行

発行 2017年(平成29年)3月16日 木曜日

2017年(平成29年)3月16日 木曜日



東北地酒はなんと26 銘柄！

3/11三陸酒海鮮会開催
足かけ5年の歴史で最大の52名の参加者集う！

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、63歳、経営コンサルタント、趣味は、縄文文化研究、この2月に株式会社上場プロフェッショナルを養成し、IPOの経営者教育も行うスクール『IPO マスタースクール』を開校、校長就任



恐れ多くも三月十一日の開催に

三陸酒海鮮会渋谷開催は、二〇一三年四月に始まってから足かけ五年、大震災発生の日に開催したことはありませんでした。会の趣旨が、三陸の海鮮を食べ、東北の地酒を飲みつつ、間接的な被災地支援を、参加者にあまり負担のない形で継続しようという非常に緩いものなので、大震災発生日開催はあまりに

開始以来の最大参加者

ところが、参加者募集開始直後からすごい数となり、会場の焚火家は貸切にしなければならぬほどとなり、それどころか、参加予約を

も恐れ多いことであると無意識に避けてきました。しかし今回は、ほぼ一カ月前に一度のペースで開催するというローテーションで決めてきた都合上、この日の開催となりました。

宮城・気仙沼からの参加

打ち止めになくはならない可能性まで出てくるほどでした。幸いにも、何とか「調整」することで事なきを得ました。それでも、会場は満席となりました。そのため東北地酒銘柄数は二十六というものすごい数となり、写真はパノラマ撮りでないと一枚に収まりませんでした。一次会も、二次会でも、

会の進行も当然ながら、いつもとは異なり、黙祷で始まり、また、普段ならば乾杯というところ、「献杯」に切り換えました。気仙沼からは、大震災で被災した宮城県庁職員が、さまざまな復興関連資料を持参し、個人として参加してくれました。



黙祷



宮城の新聞 河北新報当日版

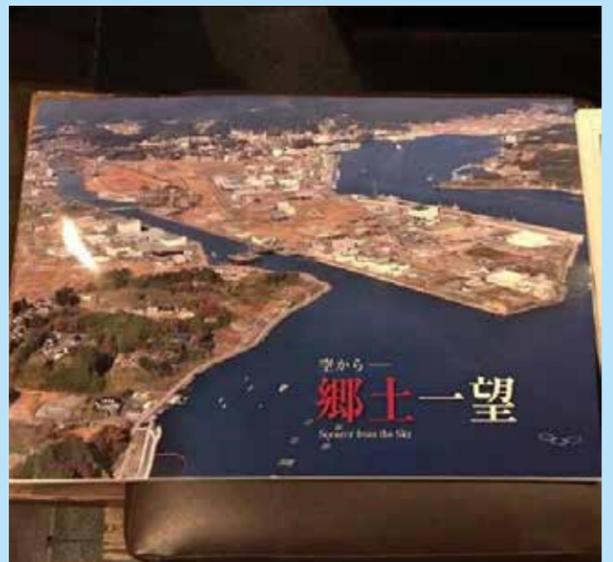


豪華な刺身、モウカザメの心臓もあり

食材も気仙沼産

三陸海鮮も、当然ながら、気仙沼産で占められました。刺身でめずらしかったのは、モウカザメの心臓の刺身と和え物でした。筆者も初体験でしたが、

独特の歯ざわりで、地酒によく合いました。ホヤの刺身も出ましたが、相変わらず、好き派とそうでもない派に分かれました。2面記事でも取り上げましたが、あのタモリがホヤの干物ファンであることを話したところ、大いに盛り上がりました。



6年後の被災地

ホヤの干物が 大好物のタモリを ホヤ広告塔に!

先日、テレビで「タモリ倶楽部」という番組を見ていたら、東北新幹線で売られている「ホヤの乾燥珍味」が、タモリの好物であり、東北新幹線乗車時には必ず購入するというのを聞きました。(1箱が税込350円)



ホヤの乾燥珍味

したが、打開策も考えつかずにおりましたところに、この場面に出くわしました。また、これまで、生ホヤが好きになれないという方にもたくさんお会いし、どうすればホヤファンになってももらえるのかずっと考えておりました。

そこで、ホヤの干物が大好物というタモリに広告塔になってもらえば良いのではないかと思いついた次第。癖の強い生ホヤに辿りつく前に、加工品ホヤを入門として、好物のひとつに加えてもらえれば、ホヤの国内消費も伸びていくことなしと思ったのですが、生産者や流通業者の方々はいかがでしょうか?

ホヤ加工品は干物以外にも、塩辛やバクライ(莫久来)という日本酒好きにとって最高の珍味もあります。



バクライ(莫久来)



ホヤの塩辛



箱から取り出したところ

第31回 水産業再興のための料理レシピ紹介 東北以北の海が主な生息域の水ダコを使った 《タコと野菜の簡単マリネ風》

今、スーパーには大きな水ダコがたくさん美味しそうに並んでいます。そこで今回はタコのマリネ風を作ってみました。水ダコは今が旬かな?
(松本談)



完成品



郷土料理愛好家
松本由美子氏

一簡単レシピ

【材料】 茹でダコ(刺身用)100g、玉ねぎ 1個(200g)、レモン 1/2、パセリのみじん切り、

【調味料】 オリーブ油 大2、塩 0.4g、黒酢 小1、コショウ少々、

【作り方】 ① たこは薄切りにする。
玉ねぎせん切り、レモン輪切り、パセリのみじん切りにする。
② ボールに調味料を入れて混ぜ、タコ、レモン、玉ねぎを加えてあえる。
パセリは青みにのせる。

旬の牡蠣(タウリン)とニンニク、玉ねぎ(アリシン)と一緒に摂り血流をアップで、元気に冬を乗り越えましょう!



写真でお伝えする
東北の風景
主役はひなまつり
しし踊り雛がすごい

写真撮影：尾崎匠



連載
むかしばなし



第四十六話
「大天狗突撃」

「頼朝に・引き渡すだつて」

今純三の脳裏に、青葉山の森で見た、兄・和次郎とその師・柳田國男の幻影が過ぎる。柳田は、確かにトヨ(と思われる娘)に言った・帝国の命により、貴女を帝都へお連れ申し上げる、と。

「西の朝廷は八百年に渡りトヨを探し求めてきた・此度頼朝が進軍を密かに許されたその条件が、トヨだ」



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当

で、進軍は止まろう。」

「アイアンパヌは腰の帯に差した二振り短剣のうち一つを、トヨに投げてよこした。刃渡りはそれでも、女たちの腕の長さほどはある。反りのある鞘で、蝦夷伝統の、蔵手というものの流れも知らなかった。」

「ダメだ、アイアンパヌ・トヨを内裏に渡しては。」

「わかってはいる、チャンネルラ・藤原が伊達に国境を築いた。トヨを失えば、蝦夷の国は滅ぶだろう。」

「案ずるな。国境の結界は外す。奥羽は完全に、内裏の国の一部になるのだ。」

「そして行く行くは、私の内裏を滅ぼしてこの国を統一しようぞ。」

光と轟きが起きて、純三が目も耳も塞いでひっくり返る。トヨは魔女の太刀を受けて怯まず、一歩も引き下がらない。芭蕉が錫杖を二人の間に突き入れて戦いを掻き乱そうとする。

「坊主、邪魔をするなら切り刻むぞ。我に血も涙も無用のもの」

「貴女方の間で何があったのか、拙僧など到底介入できぬ。だが今は危急の時」

トヨが穏やかに、遮る。「お坊様、心得ております。一瞬で片をつけましょう」

「抜かしたな！」

アイアンパヌが激昂し再び鋼が宙に閃いた・・・

「息子を救いに参る。いずれにしる、そうするつもりだった。あの大軍勢を迎え撃てるのは、息子でも夫でもない・私だけだ。それにしても」

トヨは強すぎた。宣言どおり、勝負は一瞬で着いたのだ。あの強さがあれば・・・

「無理よ・今の私は、これまでの数百年分の人生の戦いの記憶があるから強いけれど、山を降りたらまた全部忘れてしまうからね」

一行に背を向け、遠ざかろうとしたアイアンパヌがもう一度振り返った。

「トヨ・お前は奥羽の王となつてこの地を救うのか・それとも西へ帰りこの地を滅ぼすのか。」

トヨはしばしばアイアンパヌを見据え、答えた。「私は、西には戻らない。王にもならない。この国は、蝦夷の国は・滅びない」

「たまただと、宇曾利の行者がいうので、最近死んだ子供たちの魂を身体に招いて、その子を生んでもらう事にした・三十人の魂を容れて、一日ずつ交替で出来てもらい、遂に三十一日目に、本来の人格が現れた。それがアイアンパヌだったって訳」

一行は皆の石垣を降りきり、ついに再び山を歩き始める。芭蕉はその手に、最後の石を握り締めていた。

護法の強靱な、無数の骨が地下の強烈な油の生ずる業火で焼かれていた。黒煙と臭いを放ちながら川面と両岸を昼のように照らし高々と燃え上がる火達磨の中から、一本、また一本と火のついたままの骨が河へ落ちていき、やがて巨人の姿がガラガラと音を立て崩壊し始めるのだった。

河の中で骨の束の下敷きになった又太郎だが、かろうじて脱出し浮き上がる。しかし川面は浮いた油で火を発しており、悲鳴をあげながら水中に戻るのだった。

そうするうちに頼朝の大軍が小舟群を駆って火の河を渡り北岸を目指し始めていた。大河太郎を名乗った忠衡は更に烏らに油の壺を運ばせ、小舟という小舟に投下させていく。

小舟に乗る兵らは北岸に立つ忠衡に向けて矢を放った。草原のように土から生えた剣の束が動いて、忠衡の前を守り夥しい矢を跳ね返す。何艘もの舟が燃え、

転覆し、兵らが死んだが軍は途方もない勢いだった。たちまちのうちに、悲願の岸へ嵐のように迫っていく。

「待て！大河、兼任は・・・俺の手柄だ・・・！」

小舟群が川面の又太郎を通過していくが、助け上げようとする者は誰もいない。水責め、火責めの重苦にさしもの又太郎も力尽き、溺れ沈み始めた。

こんな最期なのか、俺は・・・肺に水の侵入を許さんとしたその時、何が川底から又太郎の身体を押し上げ水上から空へ一気に放り上げた。落下する又太郎を再び受け止めたのは、水面から飛び出した巨大な藤壺のような白い塊である。

人の指ほどの骨片の集合体は変形しながら北岸に迫り、遂には又太郎を陸地へ噴き出すのだった。

「うむ・護法よ、大義」

忠衡はたじろいだ。骨片の怪物が打ち寄せる波のような形で陸に上がり、足元一面に生えた剣の群れに襲い掛かったのだ。パキッ、パキッ・骨片は鉄のよう

に剣を折りながら進み、無数の金属片が宙に舞う。

「大河太郎、敗れたり！」

ぼろぼろになった黒焦げの又太郎がよろよろ立ち上がり、腰に残った斧を引き抜き、忠衡は覚悟を決めて後

ずさり止め、太刀を抜いた。刃がぶつかり合い、火花が散る。周囲に剣の残骸が散らばって、護法が地を這うように通過していく。そ

のすぐ後を、坂東の兵どもが雪崩れを打ち押し寄せた。「宮城野も、これまでか」

忠衡は、呟いた。「奥州の兵など、もはやどこにもいないではないか！降伏せよ、大河太郎。」

又太郎が言い放ったその時、勇んで駆けていた兵の群れが突然、ざわめきととも勢いを失い、一歩も進む者がなくなった。

「きよ、巨人だ！巨人が二人、座つてぞお！」

所々で同じような叫びが起き、皆が皆、北の夜空を見上げて驚愕している。向かい合つて胡坐を掻いた、途方もない寸法の巨人らの姿に不意を突かれた又太郎は忠衡の一蹴りでひっくり返った。

先鋒の進軍を見てようやく小舟に乗った頼朝も、視止めて息を飲む。

「巨人、再びか。だがあれこそは幻の最たるもの・・・怖れるに足らぬぞ。」

「殿！軍勢の向かつて左手、広瀬川上流の岸辺に敵軍を認めました。」

頼朝は対岸の左手に目を凝らした。確かに黒い、移動する一塊が見える。突如その一団が火に包まれたかと思うと、その火が無数の粒となつて一斉に空へ放たれた。火矢だ。それらは弧を描いて落ちず、各々勝手な方向へ飛び散って、形を変え、遂には数百羽の火の鳥となつて、軍勢に襲い掛かつたのだった。

「大天狗だ・遂に相見えなな。」

走りながらその一団は矢を放ち続け、火の鳥は二倍・三倍と増えていった。だが、多勢に無勢。頼朝の軍は更に膨大な矢を撃ち込んで、たちまち騎兵らは射倒されていく。火の鳥は地表に撒かれた油に点火して周囲を燃え上がらせ、綾糟が掌をかざすと大風が起きて、奥の川面までも火の海にしていく。軍団が混乱し総崩れになる中、綾糟の眼が、対岸を離れたばかりの頼朝の姿を捉えた。その一点に力を集中しようとしたその時、骨の集合体が地面を這つて迫り、がばつと音を立て、綾糟を飲み込んだ。爆発して四散、中から綾糟が再び現れる。

「名取太郎か・・・ここであつたが何百年目だ！」

無数の骨片は、地下の油で焼かれてかなり痛んでいる。様々に組み替えを繰り返して、綾糟に迫るが本来の力はもはや残っていないらしく、すぐバラバラになつてしまふのだった。

「頑張れ護法、畜生！」

尚も忠衡に挑みかかる又太郎もまた憔悴し、足元がおぼつかない。綾糟が叫ぶ。

「泉三郎よ・もう充分だ、撤退せよ。龍を失つた今、

「大天狗殿！何故かような出撃を。死ぬおつもりか」

忠衡は決して綾糟を父とは呼ばない。飽くまで、藤原秀衡の子、忠衡なのだ。

「次回予告」

シリーズ 遠野の自然 「遠野の啓蟄」 遠野 1000 景より



しぶき氷

三月初めは「啓蟄」。土中で冬ごもりしている虫が大地が暖まり冬眠していたところ、春の訪れを感じ、穴から出てくる頃という意味ではあるが、遠野の風景

を見る限り、まだ冬眠を続けなければならぬようだ。渡り鳥のうち、越冬のためには北の国から渡ってきて、冬を日本で過ごし、冬が終ると再び北の国に渡って行く冬鳥といわれるグループは、まだ北への渡りには



雛飾り

少し早いようである。またこの季節は雛祭りの季節でもある。遠野の雛祭りは豪華で、地域の特徴が豊かであり、まるで遠野のまつりがそのままお雛様になったようである。

真冬のきびしさは峠を越えたとはいえ、ときどきは雪も降るし、氷点下の日もあり、春の気配はすれども、少し先というのが今の遠野のようである。



雛飾り



空飛ぶ白鳥



夕の六角牛山



氷上のサギ



雪の参道



白鷺



大震災の風景を前にしてただ祈るだけの僧侶

大震災と宗教の問題 一枚の写真との出会い 臨床宗教師の講演に思う

既存宗教と大震災

以前、向こう見ずにも、当新聞記事に、あの大震災が発生したその後の事態に對して、既存宗教は無効ではないのか、何もできなかったのではないかとという意味のことを書いた。

大震災で犠牲となられた方々への供養に對して、既存宗教はどう応えるのか、その遺族に對してどう慰めるのか、そもそもこの未曾有の大災害をどう受け止めるべきかの指針をどのように示すのかなど、さまざま観点について、既存宗教が明確な答えを出してこなかったと思ひ込んでいた。そしてメディアを通じて、既存宗教のリーダー的地位にあるひとたちが、また各宗派が、どう対応したのか、が明確に伝わって来なかったことも加わり、筆者のそのような思いにつながり、記事を書いたのだった。

しかし、この既存宗教と大震災の問題はずっと心の奥底に引っかかっていた。そうしたところに、最近知り合うことになった医療関係者から、あるセミナーの紹介を受けた。

【日本人のこころの源にある死生観】とあり、縄文文化に傾倒する筆者として、それは、大震災被災地で被災した直後の、山のようになり積み重なったガレキに向かって、九十度以上に腰を折り曲げ、地面に着かんばかりに深く頭を下げ、ひとり祈る若い僧侶の写真であった。寒そうな季節に、素足にわらじ姿というまことに質素な身なりである。衝撃的だった。こころの奥底まで到達するように鋭く、また全身を揺すぶられるような衝撃だった。

そのなかの一人、臨床宗教師であり、また高野山真言宗楽楽寺住職の井川裕寛氏のお話に関する事前配布資料に掲載された一枚の写真に釘付けとなった。

それは、大震災被災地で被災した直後の、山のようになり積み重なったガレキに向かって、九十度以上に腰を折り曲げ、地面に着かんばかりに深く頭を下げ、ひとり祈る若い僧侶の写真であった。寒そうな季節に、素足にわらじ姿というまことに質素な身なりである。衝撃的だった。こころの奥底まで到達するように鋭く、また全身を揺すぶられるような衝撃だった。

四名のプレゼンターがそれぞれ、このテーマに関連することを、それぞれの観点からお話された。

三月四日、慶応大学日吉校舎協生館に出かけた。

も、何か関連はないかと、聞かすにはいれないテーマであった。

濟宗系の石雲禪寺副住職の小原宗鑑氏、二十八歳。禪僧である。

震災発生の翌月の四月二日から読経行脚で、宮古市から南下して、気仙沼、女川を回ったようだ。

行脚した場所は、震災前に托鉢して回った馴染みのところという。

小原氏は、ただひたすら歩き、鈴を鳴らし、立ち止まり、深々と頭を垂れる。

歩きながら読むお経は「舍利礼分」という火葬場などでお骨を拾うときに唱えるお経。

「師匠から、私は何もできないことを学びなさいといわれた。瓦礫を前にして、何か知らないけど、ただ謝るしかない」。そうした思いで読経行脚を続けて南下したという。

この写真と小原氏から教えてもらったことは、宗教とは、己の徹底的な無力さを理解することではないかと思ひ始めたことである。

それまでは、宗教理論によって、この世界やあの世を理解することだと思ひ込んでいたが、方向が間違っていたと思ひ始めた。

むしろ、無力な人間としての自分だからこそ、宗教が必要なのだ、真逆の発想に転換しなければならぬことを教えてもらったような気がする。

祈ることが宗教

前述のセミナーに戻るが、そこで井川氏が、大宗教育家として尊敬される空海が、あまりにも大事な甥の死に遭遇して詠んだ歌を紹介したが、その意味が少し理解できたように思う。

悲しい哉、悲しい哉
哀れが中の哀れなり
悲しい哉、悲しい哉
悲しみが中の悲しみなり

悲しい哉、悲しい哉
復悲しい哉
悲しい哉、悲しい哉
重ねて悲しい哉

悟りを開けば、この世の悲しみ驚きはすべて迷いの生み出す幻にすぎないことはわかっていきます

それでも貴方との別れに

死という別れの悲しみを乗り越えるのは誰でもむずかしい。空海でさえむずかしかったのである。

しかし、死は避けられない。人間にはどうしようもないことである。

そこで人間の無力さを理解したうえで、祈ることが宗教ではないのかと思った。

人の中で生まれ、死んで、宇宙に帰る

人は誰しも人の集団の中で誕生し、死ぬときも人の集団の中で死に、死んだ後も、人間の集団の中で行き続け、やがて宇宙に帰るとい

うのが仏教の教えであるが、この考え方は縄文以来の世

界観、宗教観でもあると思ひ始めた。

だからこそ日本人の琴線に

ぴったりと来るのだと思ひ

始めた。

「日本人のこころの源にある死生観」

医療を通じて生を想う

2017.03.04(土)
慶応大日吉 藤原 洋記念ホール

神奈川県内科医学会 健康長寿社会を目指す委員会
横浜内科学会 名誉会長
中山 脩郎 (医療法人 中山 医院)

セミナータイトル【日本人のこころの源にある死生観】

「祈り」と「意宣り」「意乗り」

・自分の意志を宣言すること。
・神様の意志にそのまま乗ること。

・縄文時代から日本の先住民が持っていた、人間の存在を超えた自然の力と、自然がもたらしてくれる恵みに対する畏敬と感謝の念。数千年にわたって培われてきた自然崇拜の心こそ、日本文化の根底を成す。

・日本人には、潜在的に「祈り」への渴望があるのではないか。現代社会では、祈りを捧げ、表現する場所がなくなりつつある。

・死を前にした究極的状況において、言葉はときに無力に感じられる。看取りの現場に求められるものは、実は単純に「祈り」かもしれない。すべてをやり尽くした時、そっと祈りを捧げることのできる場が必要ではないだろうか。

慶応大学日吉校舎 協生館

セミナーレジュメのひとつ

インバウンド観光(訪日外国人観光)は“東北の一人負け”

31位の宮城県、35位の青森県、39位の岩手県、42位の山形県、45位の秋田県、46位の福島県

訪日観光東北一人負け

当新聞では、3・11からの復興事業として、他の産業に比べ、それほど投資も必要なく、導入が容易で、しかも、もともと多くの観光資源を有する東北観光事業推進を取り上げ、東北の復興を後押しすべきと、何度も書いてきました。

しかし、当新聞の思惑に反して、予想をはるかに超える悲惨なデータが最近発表されました。

まずは、下図データですが、出典は観光庁で、昨年の平成二十八年の九月単月の都道府県別外国人延べ宿泊者数データです。

このデータによると、東北六県のランキングは四十七都道府県中、三十一位の宮城県、続いて、三十五位の青森県、三十九位の岩手県、四十二位の山形県、四十五位の秋田県、四十六位の福島県となっています。

まるでデジャブのように、前号で取り上げた都道府県別の上場会社数ランキングと印象がダブってきます。

日本全体では過去最高

一方、昨年は、日本全体の訪日外国人数は2403万人と、過去最高を記録しています。

それに伴う延べ宿泊者数は、一昨年データで、6561万人泊になっています。

東北六県合計のシェアは、

60万人泊と、全国合計の1%にも満たない残念な状況となっています。

この状況について、関係者が「インバウンドは東北の一人負け」と自虐的に話しているという事です。

あまりにも悲惨なデータなので、関係者の気持ちも分らないではないですが、嘆いてばかりでは事態は少しも好転しません。

「一人負け」の原因分析

こうした状況の原因については、当然ながらさまざまな分析されています。

ひとつだけの原因ではなく、数多くの原因があり、それらが逆シナジーとして絡み合っ作用しているのは当然です。

そのなかでも、第一に思いつくのは、あの3・11の風評被害に関係するものではないかということですが、関係者から聞こえてくる真の原因は、これとはまったく別の意外なものだということです。

「東北」がまとまらない

いわく、「各県の足並みがそろわない」、「一体となつて取り組もうという気概が見られない」という理由が最大の理由というのです。他地域に比べれば、「観光後進地域」と位置づけられる東北が、関係者一丸となり、こうした状況を改善すべく、課題解決に取り組むのが当然と誰もが考えると思うのですが、実態はそ

の逆になっているようです。データの結果も悲惨で、冷静に受け止めるのも一苦勞しますが、さらにこのことが真の原因だというのであれば、さらに先行きの望みまで絶たれる思いがして、出口の見えない暗澹たる気持ちに陥ります。

総論賛成、各論反対

データが示す「東北一人負け」の事態について認識を異にする関係者はいないでしょうから、基本的に「総論」に反対するものはほぼいないでしょう。

しかし、「各論」になれば話は別で、細かな範囲の主張にこだわり、結果的に会議は紛糾し、「総論賛成、各論反対」の論議があらゆる分野で交わされ、結論に

達しないであろうと想像ができます。

枝葉ばかりにこだわり、木も見ず、ましてや森を見ることがない論議はまことに不毛です。

そうした論議ばかりを見せつけられると、関係者も投げやりな気分になるのも致し方ないと思つてしましますが、しかし、それではさらに事態は悪化するばかりです。

決断するリーダー不在

こうした状況を打開する最大の特效薬は、リーダーの決断と命令です。

しかし、各論に溺れて、自己が所属する組織や立場の権益に基づき、詳細論議は棚上げして、まずはどうすればいいのかを考えさせるのが最初です。

それそれぞれの分野にはリーダーがいるはずですが、リーダーがその決断と命令をしていないのではないかと考えられます。

さらには、それぞれの組織のリーダー同士がそうした基本方針を確認し合うという基本的なリーダーシップが欠けているために起る現象と断定しても良いのではないかと思います。

さらに、誤解を恐れずに言わせてもらえば、東北にはいまこうしたリーダーがいないのではないかと思つてしまふのです。

東北復興遅延も総合的リーダー不在が原因?

3・11からの六年を振り返つてみると、東北六県は、自らで大胆な復興計画も作らず、国の政策にすがり、

被災地それぞれの事情も無視した国の復興予算の獲得ばかりに集中してきたとは言えないでしょうか。

そうした基本姿勢が、観光事業においても「発揮」され、自らは積極的に何もせず、国の政策を待ちつつ、「総論賛成、各論反対」を見せて、自分たちの「無罪」を主張していると思えなくもありません。

東北六県にこうした構造がはびこっていないことを祈るだけです。

とはいえ、昨年出かけた「北東北・南北海道の縄文遺跡」のネーミングも、喉にささった魚の骨のように、いまだにひっかかるものがあります。

なぜ「南東北」も一緒にではなく、わざわざ切り離したのか、なぜ「南北海道」

がパートナーなのか、その理由がまったく理解できないのです。

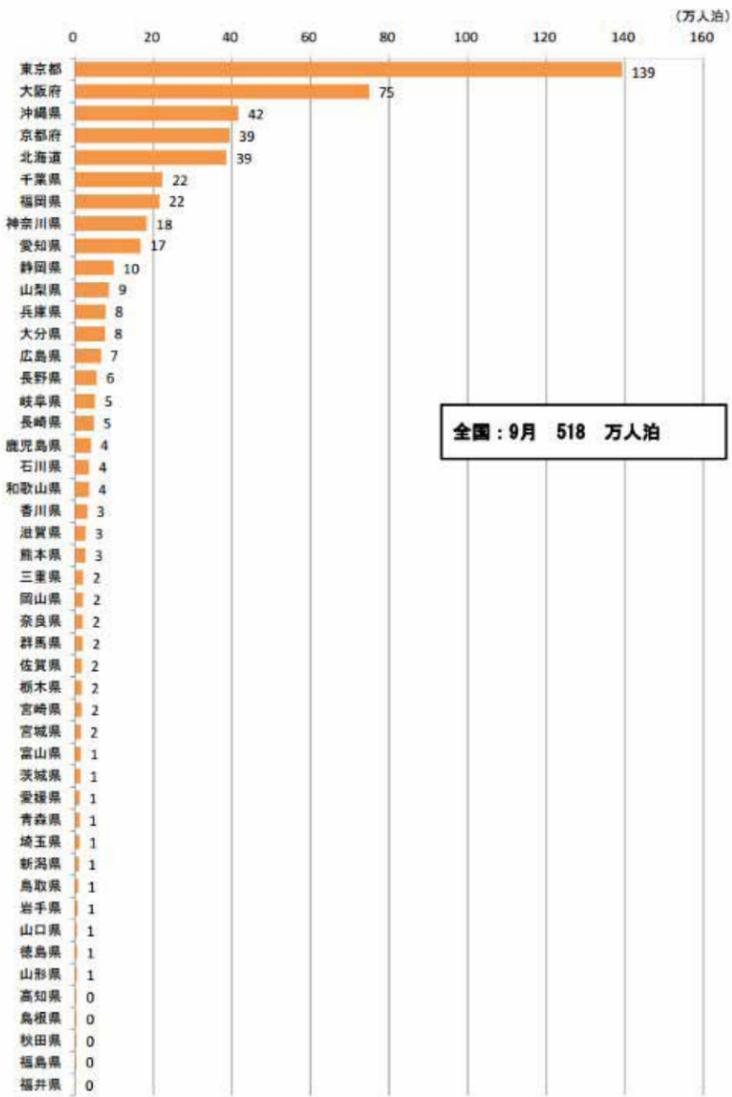
さらに想像を飛ばたかせると、プライドのかげらもなく、国の動性を見極めることに全精力を注ぎ込み、徹底的に国にすがら姿勢は、その遠因が、明治維新時における奥州列藩同盟の敗戦とその後の新政府による東北弾圧の影響なのかと勘ぐりたくもなるのです。

奥州列藩同盟敗北の影響が残っているのか

さらには想像を飛ばたかせると、プライドのかげらもなく、国の動性を見極めることに全精力を注ぎ込み、徹底的に国にすがら姿勢は、その遠因が、明治維新時における奥州列藩同盟の敗戦とその後の新政府による東北弾圧の影響なのかと勘ぐりたくもなるのです。

国に対する姿勢が、百数十年前の往時と3・11後の現在とあまりに符合しすぎていると思うのです。

②都道府県別外国人延べ宿泊者数(平成28年9月(第2次速報))



全国：9月 518 万人泊

都道府県別外国人延べ宿泊者数 東北六県のみ抜き出しランキング (平成28年9月)

県名	ランキング順位	外国人延べ宿泊者数
宮城県	31位	2万人泊
青森県	35位	1万人泊
岩手県	39位	1万人泊
山形県	42位	1万人泊
秋田県	45位	0万人泊
福島県	46位	0万人泊

平成28年9月 都道府県別外国人延べ宿泊者数 出展：観光庁「宿泊旅行統計調査」